よびごえ

因速寺機関誌

VOL, 134

芥川龍之介には有名な「蜘蛛の糸」というくも小説がある。犍陀多という悪人が主人公だ。彼は殺人などを犯した大泥棒で、いまは地獄の底でうごめいている。彼は何一つ善いことをしなかったが、たった一つ善いことをした。それは蜘蛛を踏み潰さず生かしてやったことだ。お釈迦様は、それをご存じで彼を救うために、極楽から蜘蛛の糸を垂らしてやった。「しめた」と思った犍陀多は、この糸をよじ登っていった。一生懸命に登っていき、ふと下を見ると、たくさんの罪人たちが蟻の行列のように、後を付いて登ってきた。犍陀多は、糸が切れるのを怖れて、「おりろ！おりろ！」と叫んだ。その途端に、糸は切れ、犍陀多は地獄の底へと堕ちていった。私はこのお話を、自分だけ助かろうとする利己心への戒めとして読んでいた。しかし、近頃は違っている。むしろ犍陀多は、地獄に落ちることで救われたのだと。犍陀多の救いは、極楽にはなく、地獄の底にこそあるのだ。もし極楽に登れたら、そこは救われた世界だから、もう救いを必要としない。救いは地獄にこそある。犍陀多は、私たち苦悩する人間たちと溶けて一体になった。果たして苦はどこにあるのか。苦が住めるのは、人間のちっぽけな「思い」の中だけだ。本当の世界に苦は住めないのだ。

当たり前 そう見える目は灰色に 一分、一秒この場所は まぶしき毫の噴火口

武田 釋定光（しゃくじょうこう）（住職）

■今日が私の誕生日■

タイトルの言葉は、二〇二三（令和五）年の「因速寺カレンダー」に載せた法語のリメイクだ。私たちは、ついつい日常を「当たり前」と感じてしまうけれども、本当は、一分一秒たりとも同じ出来事はない。ドロドロのマグマの如き生と死がぶつかり合い、そこから吹き出されている生々しい噴火口なのだ。

中にある「毫」は「いのち」と読む。（実際のカレンダーは「いのち」としたが）これは私が考案した文字で、ご存じの方は耳にタコができるほどに耳にしたことのある文字だろう。いのちは「生」と「死」の両面で出来上がっていることを表現している。「死」の条件はたくさんあるが、根本の原因は「生」以外にない。オギャーと生まれた途端に、「死」も誕生するのだ。だからいのちを平等に見れば、誕生は「おめでとう」であり、同時に「ご愁傷様」である。

皆さんには誕生日がある。何年の何月何日と。しかし、誕生日というものは、他者（身内等）から教えられた日であって、自分で確かめてはいない日である。赤ちゃんがお母さんのお腹の中から出てきた途端に、「今日は何月何日だ」と確認できないのは当然だ。だから、果たして自分の誕生日が、本当の誕生日であるかどうかは、確実なところは分からない。昔は、地理的な条件などで、役所に届ける時間が遅れたり、年末に生まれた子どもを、一月一日生まれにしてごまかすこともあったとか。それはひとはみな、元日には一斉に年を取ると考える習慣があったからだそうだ。

それで、間違いなく自分が確認することのできる誕生日はいつなのかという疑問が起こった。それに対する答えが、「今日が私の誕生日」である。

■他力で目覚める■

今朝も布団の中で目が覚めた。この目覚め方は、私がこの世に誕生した仕方と相似形（そうじけい）ではないかと思った。目覚めとは、目が「覚める」ことであって、目を「覚ます」ことではない。

たとえば、六時に目を覚まそうと思っても、自分で六時に目を覚ますことはできない。目覚まし時計などの力を借りて、目ざまされるというのが本当だ。たとえば六時に起きようとしても、五時五十九分五十秒、五十一秒、五十二秒、五十三秒と数えて、さあもうじきだぞ、五十九秒、さあ六時だ目を覚ますぞ、といって目覚めるひとはいない。またそんな芸当をすることはできない。

だから自分の努力で目覚めることは不可能なのだ。必ず、自分は何かに目覚まされて目を覚ます。いままで、自分の力で目覚めていたと思っていたが、それは間違いだった。目が覚めることは

「絶対他力」だった。

この世に生まれるのも同じだ。母体から生み出されて生まれる。だから、誕生も目覚めも同じ受動形である。そうなると、間違いなく、自分がこの世に誕生したことを確認できる日は、今日以外にない。「今日が私の、本当の誕生日」だったのだ。

■因位（いんに）のひと■

確かに母体から生み出されたのは過去に違いない。しかし、それで誕生という出来事がすべて済んだのだろうか。私は、母体からの誕生は過去の出来事であっても、「この世」というものへの誕生はまだ済んでいないと思っている。だから、誕生しつつある、というのが正直な実感だ。

誕生しつつあるのだから、まだ自分は「人間」でも、「大人」でもない。おそらく誕生がすべて済んで完了したとき、初めて「人間」あるいは「大人」になるのだろう。誕生が済んで完了したときとは、いつなのか。それは、「臨終」という時ではないか。だから「臨終」が来るまでは、まだ誕生しつつある状態だ。

百四歳で亡くなられた「まど・みちお」さんも、おそらくそう思っていたのではないかと、内心で思っている。だから彼は「永遠の少年」だったのだろう。仏教語で言えば「因位（いんに）のひと」だ。

この世に誕生したことも、そして人間として生きていることも、朝、目覚めたことも、すべてを済んだことにはしていない。済んだことにしていたのであれば、あれほどの詩作は生まれない。すべてを赤ん坊の目で見られるのは、「因位のひと」だからだ。

目が覚めるということは「絶対他力」だが、眠るというのもそうだ。布団の中で眠ろう眠ろうとしている間は、まだ寝てはいない。眠るということが成り立ったときは、寝ようとする意識そのものが失われた状態だ。だから、寝るという行為も、自分の意志とは無関係だったのだ。寝るのも、目が覚めるのも、共に「絶対他力」だったとは驚きではないか。

■負けるが勝ち■

それでは「寝る」と「目覚める」との中間帯にある〈いま〉はどうなのだろうか。〈いま〉は確かに、自分の力で生き、何でもできると考えている。しかし、それは「思い」であって、「事実」は「絶対他力」以外にはない。心臓を努力で動かせるひとはいないのだから。まあ「思い」も他力によって、「考えさせられて考えている」というのが本当のところだ。

だから尭は、明日のために生きているのではない。尭は〈いま〉を〈いま〉として完全燃焼しているに過ぎない。尭によって「生かされている」という言い方をするひとがいるが、私はそれは嫌いだ。本当は「生きるようにさせられている」と言いたい。「生かされている」で、確かに間違いはないのだが、それは「感謝」という呑気なこころへ傾斜しやすい。どこまでも、私にとって尭は、思いがけない出来事であり、驚きたじろぐことである。だから、誕生は、私にとって圧迫であり、私は被害者なのだ。死すべく誕生させられた被害者なのだ。さあ、この責任は誰に負ってもらおうか。それは「絶対他力」の主である阿弥陀さんだ。阿弥陀さんに全身全霊でぶつかり、それこそいのちのやり取りをしたい。これは一対一の対決だ。勝つか負けるかしかない。まあ「負けるが勝ち」という勝ち方もあるのだが。

出逢えて良かった・・・

黒田　道子（東京都江東区）

人間の誕生は他力。自分で生まれることを選んで生まれて来た人はいない、と武田先生の言葉にハッと気付かされた。確かにそうだ。

そんな中、私は縁あって真宗門徒の家に生まれた。先祖を大事にする厳格な祖父との生活が始まる。起床したらまず仏壇に合掌。いただきものをしたら、まずは仏壇にお供えし、その後、家族でいただく。私はそのような決まり事は、どの家庭でも行われているものかと思って過ごしていた。先祖を大事に思う祖父は、文京区の専西寺（せんさいじ）にお墓を建立した。私の四代前のご先祖のご命日に「月参り（つきまい）」をお願いしていた。毎月十一日がご命日の日。幼いながらに「月参り」の日は、学校からの帰宅時間を遅らせようと画策していた。何故なら、ご住職が読経されている時間は、仏間で祖父の後ろに正座してお経を聴くことがちょっと苦痛だったから。毎月、「正信偈」を聴いていると、私も少しは一緒に称えることもあり、祖父が喜んでくれたこともあった。もちろんお経の意味は解らなかったが、私が「あなかしこ、あなかしこ」という住職の言葉をよく口ずさんでいたとか…。今思うと、「御文」を詠まれていたのでしょうね。自宅では、仏壇（阿弥陀様）に合掌し、お彼岸・お盆など、年に数回のお墓参りや親戚の法要に参加など、お寺に行くことは恒例となっていた。知らず知らずのうちに真宗と出逢えていたのだった。

祖父母の命終後は、「月参り」に来ていただくことも無くなったのだが、専西寺さんは、いつもお花がきれいに植えられており、お墓参りに行くと、とても気持ちが癒やされていた。

十七年前に同居していた母同然の伯母の命終を期に、専西寺の住職に助けを求めることになる。自分でもどうして良いかわからないくらいの寂しさと、何も伯母に孝行出来なかったことへの後悔の気持ちに苦しんだ。そんな時に専西寺の住職から「仏教青年会」を開催するので出席しませんか？とお誘いをいただいた。聞法会は敷居が高かったのだが、すがる思いで参加した。「正信偈をお勤めしたいので教えて欲しい」とお願いした。仏壇の前に座り、正信偈を唱えても涙ばかり。しかし、少しづつ心が落ち着いてきたように感じた。

父がお寺の世話人をお引受けしていたので、度々、親子で報恩講や聞法会に参加させていただくことになった。親子共々、難しい仏法は理解出来ていなかったが、近田昭夫先生の優しい語り口のご法話をいただくと、心が温かく感じていた。

父も十三年前に癌になってしまい、一年の闘病後に命終してしまった。毎月の抗がん剤治療の入院の際に、いつも専西寺のことを心配してばかり。そんな父を見ていたせいか、何かお寺のお役に立ちたいと、行事には必ず参加させていただくようになっていた。親鸞聖人七百五十回忌団体参拝も、父の門徒袈裟を胸に参加させていただいた。未だに聞法会に出席してもわからないことばかりである。

平成二十七年に専西寺の住職から、門徒会員の指名を受けた。何もわかっていない私がお引受けしても良いのだろうか?と疑問はあったのだが、祖父・父から「お寺を大事に」という言葉が聞こえてきたように感じて、お引き受けすることにした。現在、東京三組の門徒会員として、ちょっとだけお手伝いをさせていただいている。

三年前の新型コロナウィルス感染症対策で、さまざまなことが制限されてしまった。聞法会ももちろんそうだった。お寺での聴聞が出来なくなったことは、本当に悲しかった。

そんな中、昨年は秋葉原親鸞講座が開催されることになり、初めて武田先生の講座に参加させていただいた。今までお聴きした先生とも違い、なぜか「またお話を聴きたい」という気持ちに駆り立てられた。四月の第一回目の聴講でブッディサロンを知り、早速、四月から参加させていただいた。私の参加していた聞法会とは全く違い、輪読後に参加者の皆さんがテンポよく感想などを語り合うことに衝撃を受けた。テンポについても行けず、輪読後のお酒と肴の時間にようやく緊張から放たれた。武田先生はとても偉い先生なのに…と毎回驚かされている。その後も因速寺さんの行事（写経の会・ご命日の集い等々）に参加させていただいている。現在、母と主人の介護の日々の中で、因速寺さんと御縁をいただき、行事に参加させていただいていることが本当に生活の励みになっている。

先日も東京教区の報恩講に参詣させていただいた。終了後に「今日はどうして参加されたんですか?」とインタビューを受けた。「武田先生のお話を聴きたかったからです。私には仏法はわからないことばかりですが、先生のお話は、また聴きたくなるんです」と答えた。

今年一年も武田先生とお会いしてたくさんお話を聴きたいと願っている。そんな〈真・宗〉、武田先生に出逢えて良かった。

■黒田さんには、ご無理を言って原稿を頂きました。まさに、真宗門徒のご家庭に生まれることも、奇跡ですね。仏法は「百千万劫にも遭遇うこと難し」と言われます。まさに、思いがけずに「遭遇」するものでしょう。真宗門徒のご家庭に生まれたから、仏法を聴聞するようになるのが当たり前と思ったら、とんでもない思い違いです。それは逆であって、仏法に出遇えたから、初めて、そこに生まれたことが「百千万劫にも遭遇うこと難し」と感じ取れるのです。真宗寺院に生まれたから、真宗を聞くようになるのでもありません。真宗の寺院に生まれても、仏法に「遭遇」するという事故に出遭わなければ、聴聞は生まれません。ですから、どこに生まれようと、仏法との「遭遇」がなければ、〈いま〉ここが奇跡だとは思えないのです。阿弥陀さんは人間の感じる「幸せ」程度では満足しないのです。仏法に出遇えて嬉しいという「思い」をも捨てさせて、さらにその底へと連れて行きます。人間が感じる「幸せ」や「不幸」は、人間の「思い」の中にしか住めない出来事だと突き詰めます。そして、人間を「思い」を超えた世界へと連れ出してくれるのです。そんな世界がどこにあるんだと言われれば、いま、ここで目にしている全世界が、まさに「思いを超えた世界」だったのです。「思い」を超えた世界を、「思い」の中に閉じ込めていただけだったのです。

住職

「お花と私」
―ほんとうの私を生きていく4―

鎌田　里子（東京都小平市）

お寺の本堂にはいつも、立派で、綺麗なお花が飾られている。お彼岸、お盆、報恩講、修正会など、行事の時には、見事なまでに最高の状態で飾られている。

浄土真宗は、生花を飾ると言われているが、うちの小さなお内仏は、造花である。生花を飾る時もあるが、時期を選んでいる。夏の暑い時期などは、すぐに枯れてしまうし、お花はどうせ枯れてしまうのだから…と思うと、仏壇に生花を飾れなくなった。

何故だろう。「枯れる=死」をイメージするからか？

両親を亡くしてから、「死」というものを、一層近くに感じるようになった。枯れた花を見ると悲しくなり、胸が苦しくなる。お花の死と両親の死を重ねてしまうからだろうか。とても綺麗だったお花が、枯れて醜くなっていく姿をかわいそうと思う。いのちの終わりの姿を見るのは辛く、死を遠ざけたいと、どこかで思っているのかもしれない。やっぱり、生きているほうが良くて、死ぬほうが暗く、悲しいことと思っているのだろうか。

武田先生のお話を聞いていると、〈朿〉という字からも分かるように、生と死は表裏一体。同じ重さであるはずなのに…。

ご法話を聴聞する場が、「生老病死」を教育する場ならば、綺麗なお花を飾るよりも、枯れた花を飾って置くほうが、インパクトがあるのではないか？

でも本堂のお花は荘厳であり、お浄土に枯れた花があっては、誰も行きたくなくなる。本堂で綺麗な荘厳が飾られるのは、浄土に憧れを持ってほしいからか？

枯れた花の前で、ご法話をされている先生の姿を想像してみたが、やはり、そんな場面は見たくない。美しいお花の前で、お話しをしてほしい。

お彼岸やお盆、年末年始の時は、同じお花でも、値段が上がる。その期間だけは、普段よりお花を買う人口が増えるから、値段を上げても売れるのだろう。そのような時に、お花を買うと、同じお花なのに、高い値段を払わされるなんて、損した気分になる。なんか悔しい！娑婆の資本主義に踊らされているようで、買いたくなくなる。だから、その時期を外して、私はお花を買っている。しかも、お花が長く保つ寒い時期に、季節のお花やサービス品を…。だって、浄土真宗は一年中、四六時中、仏様とお話をしているのだから、お彼岸やお盆の時期だけ、特別にお花を買ってお供えする必要なんてないのではないか？

お盆の時など、とても暑い時に、お花をうちに連れてくるよりも、お店にいたほうが、お花も幸せなのではないかと思う。夏の時期は、毎日朝晩、根切りをして、お水を替えても、あっという間に枯れていく。かわいそうだし、正直、世話をするのも面倒という思いもある。でもお花は自分で、新しいお水を飲みに行くことはできない。飾られたその場から、一歩も動けないのだ。そう思うと、放っておくこともできない。

年末のお寺のお磨きの後も、本堂には綺麗なお花が飾ってあったが、その一週間後の修正会には、松など立派なお花に入れ替わっている。本当にいつも綺麗だ。でも前のお花はどこにいってしまったのだろう?まだ枯れてはいなかったはず…。捨てられてしまうのなら、もったいないし、お花の行方が気になったりもした。自宅の小さな花瓶の水換えだけでも大変なのだから、お寺さんの大きな立派なお花を、いつも綺麗に咲かせておくことは、本当に御苦労なことだろうと思う。

お花の中には蕾のまま、咲かずに、そのまま枯れてしまうものもある。そんな時、世の中には、咲けない花もあるのだなぁと思うと、それが自分と重なり、落ち込んだりもした。でもお花を飾ると、こころが癒やされることも確かだ。「綺麗だなぁ!」と思うこころは、悲しみや苦しみを一瞬にして溶かす効果がある。魔法のようだ。

それなのに、両親を介護中だった頃の私は、花などには、目もくれなかった。晩年の母は、病院受診以外に、一人で外出はできなくなった為、リハビリ目的で、近所の散歩に連れ出した。その時、必ず母は、道端の小さな花たちに気付き、ふと足を止めた。だが、私は全く気付かず、綺麗と思うこころもなかった。しばらく眺めている母に対して、「リハビリなんだから、早く歩いて!家にはアスペルガーの父が待っていて、帰るのが遅いと不機嫌になるから、のんびりしていられない。夕食も作らなくちゃいけない。」とイライラしていたのだ。大好きな母と二人で、外を歩ける貴重な時間だったのに…。

ある時、母が道端の草花を摘もうとした。「摘んだら、枯れちゃうよ」と私が言うと、母は黙って、手を止めた。自然のまに、外で咲いているほうが花も長く生きられると思ったが、今にして思えば、お花の力を借りて、腰椎の圧迫骨折で自宅にしかいられなくなってしまった母のこころを癒やしてもらえばよかったかなと思う。あの頃の私は、一人で両親の介護をしていて、花が綺麗だなんて思うこころの余裕は全くなかった。怒りと悲劇のヒロイン根性でいっぱいだった。

十年間、両親の介護をして、二人を見送り、しばらくしたある日、ふと道端のお花に気付いた。その時、「あ〜、私はお母さんの眼をもらったんだな」と思った。私に気付けるはずなんてないもの。今見ている風景も、私が見ているんじゃない。母が見ていると思った。母の眼を通して、私が見ているのだ。二人で見ている。

私の眼だけでは、見えないもの、気付けないものが、この世には、花以外にもたくさんある。以前からあったのに、今までは見えなかったものが、「お母さんの眼」をもらったことで、見えてくるような気がした。世界はそのままに、新しい世界に変わる。それは、がんじがらめにされていた自分からの解放なのかもしれない。「悲劇のヒロイン」でいる間は、救われない。今、私が見ている世界は、母もきっと見てくれているに違いない。

お花をお供えするだけでも、様々な葛藤や思いが交錯する日常。資本主義にどっぷり浸かったケチケチ根性や、お花から癒やしをもらいながらも、人生を卑下慢根性で貶める自分もいる。煩悩まみれの私は、母の亡くなった翌年の二〇一五年から因速寺さんに通っている。今年は、因速寺さん創建四百周年である。本堂に飾られるお花と共に、様々な自分と出遇い、新しい自分

を発見していきたい。その為にも、やはり、お花の綺麗なほうは、阿弥陀さんのほうに向けて飾るのではなく、私のほうに向けられていてほしいと思った。

お花は、これからも私と母を繋いでくれるだろう。私は「生まれてきて、よかった」と、母に伝えられるようになりたい。

南無阿弥陀仏　〈釋尼弥約〉

■お内仏（仏壇）に飾ってあるお花を見ても、綺麗だなと思うくらいで、ここまで、「お花」について考えたことはありませんでした。「花」を観想すると、浄土の荘厳としての味わいが生まれてくるのですね。両親の介護をしているときは、花を美しいと思って立ち止まる余裕もなかった。それが両親を送った後、花を美しいと思った自分を発見したのでしょう。花を美しいと感じた眼は自分の眼ではなく、お母さんの眼だと。自分はお母さんの目をもらったのだと。なんとコペルニクス的な発見でしょうか。私は、お母さんの目ではなく、阿弥陀さんの眼をもらったと気付いたことがありました。私が見ている光景は、私を通して阿弥陀さんがご覧になっている光景だと。まさか煩悩に犯された自分が見ている光景が、阿弥陀さんの光景だなどとは傲慢だと叱られそうですね。しかし、私が見ている光景がポジであれば、阿弥陀さんの光景はネガです。『成唯識論』には「摂して自体と為し、安危を同じくするが故に」とあります。身体も環境も自分自身なって下さり、安全な状態のときも危険な状態のときも一心同体になって下さると。それであれば、私の見ている光景を透過して、阿弥陀さんがご覧になっていると感じることも許されるのではないでしょうか。花も、私を教え導く阿弥陀さんの教材に違いありません。

住職

東日本大震災から

信楽　一真（横浜市港北区）

私は、お話をさせていただいたり、文章を書かせていただくのが大変苦手です。よろしくお願い致します。

いつも、御法話会や真宗寺院での行事等で御門徒様や住職の先生やご家族様には大変お世話になっております。

二〇一一年三月十一日（金）は、私的な事情で都内（代々木）におりました。駅前の中高層ビルの二階の一室におり、会合の最中でした。突然、グラグラ揺れ始め、段々大きな揺れに変わり、とても怖くなり、部屋のドアを開け、外に飛び出しました。私は臆病ですので、通常の人の何倍も怖かったです。外には美容師、看護師、予備校生、サラリーマン、ＯＬの方々等、沢山の人たちが道路にあふれていました。

特に、美容、看護学校の女性や白衣の女子学生の方々が、キャーキャーと叫びながら、地震の恐怖を感じておられました。私は自分が死ぬのだなと本当に思いました。予備校のビルが振動により、しなるという表現で良いか分かりませんが、動いていたり、代々木駅ビルも、真向かいのビルが太陽に照らされ、反射した姿で動いているのが分かりました。もう駄目だな、これでおわりだなと強く思いました。

いままでいろいろなことがあったけれど、まだ何もキチンとし

たことが出来ずに死んでゆくんだなと残念な気持ちになりました。しかし、一旦、揺れが収まり落ち着いたとき、周囲の方々は、携帯電話でご自宅や勤務先に安否の確認をされていました。

当時、私は携帯電話を持っていませんでしたので、皆様は便利で良いな、羨ましいな等と思いながら、自分はどうしたらよいのか、途方に暮れていました。すると代々木駅前の公衆電話ボックスに長蛇の列ができており、ＮＴＴ会社様の方で無料での通話を提供して下さっていました。私は一目散で走って、電話ボックスへ向かい並びました。三十分も待たなかったと思いますが、ようやく順番が回ってきて、実家に連絡ができました。

自宅でも、当時、大変な恐怖で外に出たということでした。この時私は、生きていてくれて良かったととても嬉しく、喜びを隠せなかったです。

地震当日は、鉄道復旧が見込めず、横浜まで歩くこともできませんし、タクシーの乗り合いも渋滞を引き起こしかねない等、結局、会合中のビルで、明け方まで滞在することになり、翌日、午前中にビルを出て、午後、大回りして横浜の実家に帰宅しました。帰ってこれて良かったです。後日、会合のメンバーの方に、私が地震発生当時、怖くて部屋から出て行ったことを臆病者扱いされ、笑われましたが、正直言うと、いまでも自分の判断で、その部屋を出て行ったことを後悔していません。地震で、もう助からない、死ぬんだと思ったとき、何でもしますから、どうか命だけは助けて下さいという気持ちになりました。

あの東日本大震災から十二年が経過しようとしていますが、あの時、命を再度与えてくださった阿弥陀様から「おまえ（私のことです）はキチンと命を大切にして生きているか」と問われると、阿弥陀様にキチンと答えられる生き方が出来ていないなと思いました。何だか、震災以前の自分とあまり変わらない状態だと思いました。

いま現在は、数年前から、御法話会のご縁をいただきまして、住職の先生や皆様から、いろいろなことを教えていただいております。真宗の先生方や皆様からお話を伺わせていただく機会が増えて有り難いのですが、お寺に行くと良いことがあるとか、自分の都合を叶えたいために阿弥陀様から何かの“はたらき”を待ち望んでいる自分の精神状態を改善することはできないようです。

お寺の御法話会で、私は楽しみにしていることがあります。住職の先生や御家族様にお会いさせていただけるのは勿論嬉しいのですが、先生のお孫さんが元気に動き回っている姿が、無邪気というか、無垢という表現でよろしいのでしょうか、とても元気をいただいております。自分の頭の中でグルグル思い巡らす否定感情や苛立ちというのが大変強い私は、あの頃（先生のお孫さんが成長されている姿）に戻りたいなといつも思っております。どんなに経済成長が発展しても、人と人とのつながりがなければ生きてゆけないなと思いました。

新型コロナウイルス感染症、ウクライナ侵攻戦争、物価高騰経済問題等でいままでの生活様式や形態が大きく変化することが求められているように思いました。行き詰まりやすい風潮が感じられますが、こういう情勢の中、特に私は、御法話会で、皆様にお会いさせていただきお声を掛けてくださることで、とても励まされています。せっかくご縁をいただいた御教えですので、これか

らも真宗のご法話を聞かせて下さい。そして、日本中に“親鸞聖人の御教えを聞かせていただける会”が宗派や年齢、職業を問わず、盛んに開催されるようになることを願っております。

何年もキチンとした文章を書いたことがないので、何を書いているのか、訳の分からないことも多かったのではないかと思いますが、今後とも御法話会等で御指導を宜しくお願いいたします。有り難うございました。

■苦手な文章を強要したみたいで、申し訳ありません。これってパワハラには当たりませんよね。震災当時の描写は、まるでドキュメンタリーでも見ているようで、読みながら、私も当時の自分の動揺を思い起こしておりました。しかし、喉元(のどもと)過ぎれば熱さを忘れるで、私もまた以前の日常に戻っております。あの大地震の中で、自分がどう慌てふためくかなど、自分には予測できません。どんな自分が出てきても、それはそれとして、驚きながら、たじろぎながら、有り難く受け取るしかありません。そもそも〈自分〉は自分の所有物ではありませんからね。つねに自分の予想を超えた〈自分〉が現れているに過ぎません。それから、何かを期待してお寺に行くのは、いいことじゃありませんか。御利益を期待しないで、他に何しにお寺に行くのですか。「いいことあるぞ～ミスタードーナッツ」じゃありませんけれど、「いいことあるぞ～法話会」ですよ。御利益を求めて、お寺に行くと、自分が求めていた以上の「いいこと」が与えられるように出来ているのです。だから現世利益おおいに結構！親鸞聖人も「現世利益和讃」を作られているじゃないですか。貴方が感じていることは、どんな些細なことでも人類の代表として感じている〈仏事(ぶつじ)〉なのです。

住職

因速寺 創建四百年
記念法要のお知らせ

因速寺は、江戸時代の初め、元和九年（一六二三年）に、江戸・京橋竹町に創建されました。その後、八丁堀材木町へ移転します。ここで明暦の大火に遭い、大川（隅田川）を渡り、深川黒江町（永代二丁目）に移転します。この地で三八〇年間、営まれておりましたが、大正十二年の関東大震災により、昭和二年（一九二七年）、三度目の移転をし、現在の地に到っております。

一口に「四百年」と言いますが、今日まで因速寺を支えてこられた、寺院関係者並びに御門徒の皆様の力には、今更ながら驚かされます。私が「第十三代住職」ですので、単純に父母（二人）、祖父母（四人）、曾祖父母（八人）と計算していくと、四〇九六人の先祖が関わっていたことになります。

本尊の阿弥陀如来は、鎌倉期に仏師・快慶の工房で製作されたもので、約八〇〇年間、奉安され続けております。

この秋に、創建四百年を期して、記念法要（報恩講を兼ねる）を計画しておりますので、ここにお知らせ申し上げます。

（詳細内容は期日が近くなりましたらお知らせ致します）

法要勤修日　二〇二三（令和五）年十月二十九日（日）

★因速寺　掲示板★

永代経法要

―人間を考える集い―
兼ご命日の集い

門徒・檀家で有る無し不問です

5月28日(日)午後1時～(受付午後12時30分)

冥加志お一人三千円

勤行＋法話＋落語

永代経とは永代に渡って私にまでお念仏を伝えて下さった先祖を偲び、また私から永代に渡って伝わっていくお念仏の教えを想う集いです。今年は法話の後の余興として、古今亭菊志ん師匠の落語があります。どなたさまもお気軽にご参加ください。

◆写経の会◆

門徒・檀家で有る無し不問です

毎月1回　午後1時30分～4時頃まで（お勤め＋座談含む）

開催日：3月8日（水）4月12日（水）
5月24日（水）6月7日（水）

教材：正信偈、仏説阿弥陀経、仏説無量寿経（上下巻）

一時間程写経に集中し、その後は本堂で勤行（おつとめ）をします。お菓子とお茶を飲みながら車座になり座談をする会です。写経のみの参加でも構いません。非日常を味わってみませんか？どなたでも参加可能です。

冥加志：初回は三千円（教材費込）
二回目以降五百円

◇ブッディ・サロン◇
【輪読会】

門徒・檀家で有る無し不問です

一冊の本をみんなで輪読した後、お酒と肴と仏法を味わいながら、語らう会です。参加される皆さんは職種も様々、住所も様々、なにも強制されることはありません。様々な本を通してそこに流れている〈ほんとう〉に触れるのが会の趣旨です。どうぞご参加下さい。どなたでも参加可能です。

●下半期の開催日　午後四時スタート

●冥加志：お一人千円　※遅刻・早退自由です♪

●日　程：3月26日（日）　4月23日(日)
5月はお休み　6月25日(日)

◇ご命日の集い◇

門徒・檀家で有る無し不問です

毎月のご命日のかたを縁として仏法を聴聞する集いです。やがて私自身も、この世を去っていきます。みすみす死ぬのになぜ生きるのか？人間の根源的な問いに、あなたならどう答えますか？

開催日：4月23日（日）午後2時～
5月28日（日）兼永代経　午後1時～

内　容：読経（焼香）＋法話（住職）

冥加志：冥加志は各会で異なりますので詳細は後日

ニュース【news】

New!
住職新刊本発売

『〈真実〉の奴隷』
実費冥加金５００円

〈真実〉の意味は人間には知らされていない。だから〈真実〉なんていうことは、人間には決して分からないんです。ただ「真実の影」だけを知ることができる。影とは、人間の掴んだ〈真実〉は〈真実〉ではないぞという否定作用です。

※「まっさん塾」講演録シリーズの第十一巻目になります。

朝からゆったり、寺ヨガ教室

毎月奇数週の木曜日午前10時30分～
冥加志千円

3月
16日（木）
30日（木）

※ご参加ご希望の方はお寺までお問合せ下さい。
月により中止や日時の変更などございます。

◆六組聞法会◆

午後2時～会場　光円寺（港区虎ノ門3の23の10）
冥加志千円

3月4日（土）講師　鈴木君代師
4月1日（土）講師　榔野明仁師
5月27日（土）講師　マイケル・コンウェイ師

詳しくは tokyorokuso@gmail.com までお問い合わせ下さい。

雑言雑語

この雑言雑語は読み飛ばしてもらう為にフォントを小さくしている。他愛もない話しか書けないので恥ずかしい限りである。最近出会った言葉が頭から離れない。住職の言葉なのだが、「私達がどこで本願と接点をもつかといえば唯除という一点である」と言われハッとした。確かにそうだった。真宗を分かった顔して聞いているが、何一つこちらの手柄はなかったのだ。お前は救われんと唯除かれるところにしか救いは成立しないのだった。眼が覚めた思いで聞いていた。また振り出しに戻された思いだ。そうか何度でも振り出しに戻す用きが阿弥陀さんの用きだったのだ。賽の河原の様に、また一つ一つ聞法するたびに石を重ねて、阿弥陀さんの手柄を横取りしては偉くなった顔をしていたのを阿弥陀さんが一刀両断して絶対零度に戻してくださる。私の聞法はその繰り返しだった。阿弥陀さんに背いてでしか感じられない光、本当にあさましい人間だ。先日、延塚知道先生のお話を伺ったところ光について「光といっても仏さんがピカピカ光っとるんじゃない、言葉が人間を貫いたところに光として表現されている」と阿難とお釈迦さまの出遇いについて言われていた。言葉に貫かれる何と勿体ない事だろうか、すでにしてこの道ありとお教え下さっていたのだろう。南無阿弥陀仏　釋定志

表紙画題
『春待ちうさぎ』
武田美輪（坊守）

『よびごえ』一三四号
発行所　因速寺（真宗大谷派 本山 東本願寺）
〒136-0074 東京都江東区東砂1の4の10
TEL(03) 3644-0986 FAX(03)3648-4391
Email info@insokuji.com
HP https://insokuji.com
編集／発行　武田 定光 Takeda Jyouko
発行日二〇二三（令和五）年三月十日
Copyright 1990 INSOKU-JI Printed in Japan